Y1-7

紛争・災害による身元不明者の調査と身元同定の必要性に関する検討

熊本赤十字病院　国際医療救援部
○宮田　昭、鈴木　隆雄、高村　政志、
曽篠　恭裕、麻生　陽子

災害時の日本赤十字社（以下、日赤）の業務は多岐にわたるが、創立以来の業務のひとつに犠牲者の遺体回収と処置および安否調査がある。阪神淡路大震災後、自治体と県支部間でこれらについて協定を結んでいる地域もあるが、想定に基づく災害訓練以外は実態が伴っていないのが現状である。一方、日本国内では外国人の安否調査は日赤の業務とされている。加えて近年多発している海外での大災害やテロに日本人が巻き込まれた場合の対策も課題の一つと考えられる。日本での身元確認作業は所轄する警察と各大学の法医学教室が独立して行っており、法医学教室はマンパワーなどの要因で現状の行政解剖でほぼ手一杯である。今般、これら業務の世界的な趨勢を調査するため　（ア）ICRCとVIFMが共同で開催した身元不明者の捜査と身元同定のためのワークショップ　（イ）ポルトガル赤十字社主催による紛争・災害による身元不明者の捜査と身元同定のためのワークショップ　（ウ）第41回国際法医学会学術総会に出席し、調査を行ったので、その結果を報告したい。「紛争・災害による身元不明者の調査と身元同定」はDisaster Victims Identification（DVI）と英語標記される。DVIという言葉自体が国によってはニュースでそのまま使用されるように、かなり一般的な名詞となっているようである。DVI活動では屍体安置所の設営と運営、死体の取扱い、死後と生前の情報捜査、さらに屍体同定のための司法手続きなど多くの作業がある。日赤が関与する業務はその一部に限定されるであろうが、DVIは災害救援の一部であることを認識して、国内外でDVIの研究を今後も進める必要があると考えられた。

Y1-8

パキスタン国立小児病院薬剤部におけるボランティア活動を通して

松山赤十字病院　薬剤部
○宮本　佳子、濱田　清

【概要】2007年1月より2年間、パキスタンの首都イスラマバードにある国立小児病院・母子保健センター薬剤部にて、薬剤師としてボランティア活動を行った。パキスタンは、2度の大地震や、洪水、頻発する大規模なテロなど、自然、人的災害が多い国である。また、出産時の母子死亡率も以前高く、ポリオも撲滅されていない。アフガニスタンやパキスタン北部からの多くの難民を抱えており、貧困層の医療水準は以前低い。

【派遣先】パキスタン医科学研究所（Pakistan Institute of Medical Sciences）国内最大の国立病院である。敷地内に成人病院、小児病院、母子保健センター、熱傷専門病院、看護大学などの教育機関がある総合医療施設である。日本からの無償資金援助や、専門家、ボランティア派遣を受けている。2005年の震災時は被災者がヘリで移送され、テロや大事故が起こるたびに負傷者が多数運び込まれてくる国内の基幹病院である。2008年のミャンマー洪水、中国四川省大地震の際には医薬品のドネーションも行っている。

【活動内容】現地人と共に生活し、共に働く中で、技術移転を行うことを目標に活動を行った。1.薬剤倉庫において、ビンカードによる手書き管理と並行して、エクセルを使用した発注・在庫管理方法を薬剤師・倉庫管理者へ指導し、欠品防止を目指した。2.薬剤師と共にチェックシートを使用した病棟巡回を行い、期限切れ防止を目指した医薬品管理方法を看護師へ指導した。3.外来、各病棟に設置されている災害医薬品棚の管理・引継ぎを行なった。

【結果】医薬品の期限切れが減少した。また、先入れ先出し、衛生概念など繰り返し注意することで皆の意識が変化した。持続可能な支援の難しさ、信頼関係の構築の重要性を実感した。